



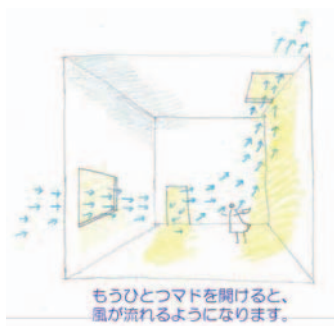
## 赤松佳珠子

建築家 CAパートナー

法政大学デザイン工学部  
建築学科准教授

『建築はものではなく出来事である』

建築空間を考えることは、そこにある「モノ」によって、そこで起こる「コト」を考えることです。その場所で、そこにいる「ヒト」がどれだけ気持ちよく、いきいきと過ごすことができるのかがとても重要です。



〈世界は事実の寄せ集めであって、物の寄せ集めではない〉とはヴィトゲンシュタインの言葉。〈建築は‘もの’ではなく‘出来事’である〉とは原広司の言葉ですが、これらの言葉が示すように、建築はコンクリートや鉄やガラスなどの物質を用いて造られていますが、出来上がった建築空間は決して無機質な箱なのではなく、あくまでもそこで起こる出来事を発生させるためのデバイスなのです。建築空間は、風・光・アクティビティなどの様々な要素の取り扱い方次第で、魅力的でいきいきとした空間になるかどうかが決まるのです。

『雑木林のなかに教室群が滑り込む』

熊本アートポリス参加プロジェクトで、第21回 aaca 賞を受賞した宇土小学校です。宇土小は熊本市郊外の住宅地に位置しており、既存校舎のグラウンドの南側



には、熊本らしい力強い樹木が茂っていました。校舎の向こう側に見える、突き抜けるような青空と濃い緑、そして子供たちの笑顔が印象的で、それらを新しい校舎でも受け継ぎたいと考えました。日本では、まだまだ小学校の教室にはエアコンが無いことも多く、ここでも学校の南西に位置する白山からの弱い風をいかに学校全体に行き渡らせるか、が大きなテーマとなりました。ルイスカーンは、1本の樹の下で語り始めた人の話を聞きに人が集まる—それが学校の起源である、と言っています。この木と同じような存在であるL字型の

壁が敷地全体に散らばって、その場所が学校となる。雑木林の中に教室群が滑り込む、限りなく外の様な学校が実現しました。

『木立の広がりによってアクティビティが見え隠れする光と風に応答する建築』

流山市立おおたかの森小・中学校及びおおたかの森センター、こども図書館では、宇土小のL壁をもっと面的に展開しています。学校と地域施設が一体とな



ったこのプロジェクトは、新しい住宅地における交流拠点として、幅広い世代の人たちが集う街の核となる場所です。隣接するおおたかの森の緑を住宅地へと繋ぎ、光や風が通り抜ける学校を目指しました。今年の4月に開校したばかりですが、市民向けの見学会では4000人近い人たちが訪れ、地域の人たちの期待の高さを実感しました。

『国道の中州に浮かぶシティ・ゲート』

広島では、アストラムラインという新交通システムが市内と郊外を繋いでいます。市内では地下ですが、JRの高架をくぐると地上に顔をだし、そこから先は高架橋の軌道を走ります。新白鳥駅はJRとの新しい乗継駅として、その交差点につくられました。大きな国道の中州という特異な敷地のコンテキストから導き出されたフォルムは、アストラムライン乗客だけでなく、車、バス、新幹線内からもよく見える、新しい広島のランドマークと言えます。薄いシェルには大小の丸穴が開いています。シェルは、国道の激しい交通から人々を柔らかく守りながら、光や風が通り抜けて行きます。



『歴史ある住宅地に生まれた新たな地域の拠点』

最後は、流山と同様に、立川市立第一小学校、柴崎図書館、学童保育所、学習館が複合化された地域の拠点施設です。創立140年を超える立川第一小学校の耐震建て替えに伴い、その他の地域施設を複合化させる計画で、すべてが既存施設からの移行であったため、打ち合わせ相手は相当数に上り、当初は反対意見もありました。それら様々な議論を経て完成したこの建物は、歴史を刻んできた住宅地の中に、子ども達の姿や地域の人々の活動が見え隠れする、新たな多世代のための活動拠点としていきいきと使われ始めています。